第4章　ノコギリ屋根工場の活用事例

1.織物工場、織物関係での継続的使用

はじめに

「織都」としての桐生の景観を形づくってきたノコギリ屋根工場は、ひとつひとつが美しい。時間の堆積も個性に加味されて、それぞれがかけがえのない存在感を放っている。美のための美ではなく、用あってこそ生まれた美であり、虚飾がない。

だからこそ、本来の建造目的である織物の業に使われるのがもっとも自然で健全な、落ち着いた姿である。問題は、織物産業の斜陽化によって空洞となったノコギリ屋根の転用だ。桐生市内では多くが倉庫や駐車場になっているが、特に"活用"を意識しなければ、柱の少なく広い空間と天井の高さから、なるべくしてそうなっていると思われる。

しかし「都市再生」を託すほどのまなざしでノコギリ屋根を見つめ直すとき、外観は内部に生き生きとした豊かな営みを抱えていればこそ、光を発するということが実感できる。ここではそうした事例のいくつかを紹介していきたい。

織物工場で

「桐生の繊維産業はイタリア系になってきた」と、桐生絹織株式会社の牛膓章社長(55)は語る。大勢の織り子を抱えてガチャガチャ大量生産し輸出してきた時代は過ぎた。天然繊維で織りにくいもの、特殊な先染めなど、個性的で付加価値の高いものを少ロットでクイックレスポンス、春夏秋冬に提案していく。99%、婦人服地を手掛けている。

桐生で一番桁行が長い、4連のノコギリ屋根の桐生絹織株式会社。織機が減った現在、西側部分は駐車場として利用している

その器としてのノコギリ屋根工場は、桐生最大の桁行24間を誇る。昭和初期、新潟県加茂市出身の先代が建造した4連は黒い瓦屋根で板壁、朱赤の樋がアクセントだ。かつては60台のジャカード織機が入っていたが、いまはレピアで、試織が主。そのため半分は駐車場にしている。「電力のない時代には採光面もメリットですよ。いまでも工場の中が明るいと感じますから」と牛膓さん。

「先代が建てたものを、ぼくの代で壊すわけにはいかない。瓦が落ちたり屋根の谷の部分に木の葉がたまったり、メンテナンスは出入りの大工に頼んでいます。お寺と同じ材を使ったと聞いているので、何百年という木の寿命分はもつんじゃないか。みんながノコギリ屋根を壊すと言ったとしても、そ

れならなおさら、残そうと思いますね」

繊維は先行産業であり、産業には盛衰があると認識する。「繊維は人がたくさん必要だから、まち全体が浮上した。後発の金属産業の仲間にも、桐生文化をつくれと言ってきました。もう金属も、中国や東南アジアに移ってますけどね」。ふるいにかけられ残ったものの強さを、工場から響く機音が語りかける。

ノコギリ屋根工場の北に位置する貸しアパートは、元従業員宿舎。建て替えにあたって並びの蔵と雰囲気を統一するなど、景観にも配慮している。

生方さん夫妻は独立してノコギリ屋根工場を得、ここで力を合わせて働いてきた。工場の前には色鮮やかな糸の束が揺れる

染色工場で

生方寅次郎さん(79)、貞子さん(76)が力を合わせて働いてきたノコギリ屋根工場は、1連だが意外と背が高い。赤、緑、黄、紫……、染め上がった色とりどりの糸を3段にかけることができ、「それはきれいよ」と貞子さんが回想する。

同じ尋常小学校を出て、寅次郎さんは染屋に、貞子さんは機屋に奉公。所帯を持って独立し、3〜4年後の昭和31年に工場を建てることにした。頼んだ大工が斡旋してくれたのは、飯塚機業のノコギリ屋根。壊すところだったのを移築したという。

「夢中だったけど、機屋のより高いし、ここらじゃないノコギリだね。2つあれば面白かったねえ」と寅次郎さんが腰を伸ばす。

釜やボイラーなどの設備を整え、最盛時は職人7〜8人を使った。赤みが足りない、黄みが強いなど、ちょっとした染料の配合にも気を使う仕事だが、昼間は電気を点けなくても明るく、夏は涼しいのがよかった。冬はお湯に手をつけて暖をとった。

男の子3人を育て上げ、土地を取得することもできた。ノコギリ屋根は強い台風で壁が落ちたりトタンが飛んだことはあったが、屋根を塗りなおした程度で修理の手をほとんど加えることなく、現在に至る。「火を使う仕事だから、火事には気をつけたね」と寅次郎さん。いまでもメガネをかけずに染料を量るというので驚くと、「湯気で曇るからさ」と笑った。

最近はぐっと仕事が減ったが、ひな生地や神社のお守り用など、色あざやかな糸が干してあった。2人でないとできない仕事だ。「色の薄い濃いで争っても、始めっから毎日一緒の内仕事、仲が悪いとできないよ。休みのときだっておじいさんの単車に乗って、日光や藪塚温泉に行ったもの」。注文がある限り、動ける限り、染屋を続けるつもりだ。

◇　　◇　　◇

以上2例は建造当初の形で使い続けている例だが、桐生に現存するノコギリ屋根の4分の1は

いまだ繊維産業というから、底力を感じる。

帯の製造メーカー後藤グループもその代表格だ。木造のノコギリ屋根工場は人肌の優しさで見学や撮影ポイントになっており、生産の場と商品を結びつけた「ファクトリー・ショップ」の構想もあるという。

2.様々な活用事例

博物館・資料館に

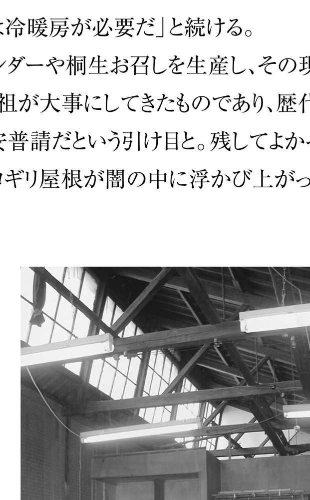
ノコギリ屋根の戦略的活用にいち早く踏み切ったのが、明治10年創業の森秀織物である。体験型の資料館である織物参考館「紫」は、織物にかかわる資料を収集、保管、公開する場として、また繭から糸をとり染色して織り上げるまでの工程を動態展示する場として、昭和56年に開館した。「動く、さわれる、生きている」がキャッチフレーズで、企画展や講演会、教室なども盛んに行われている。

森島純男館長は「ノコギリ屋根は北窓の一定した光を得られ、音がやわらぐ。レンガだと難聴者が出るので木造にし、ジャカードも日本では木製。職人にとって心地よいよう工夫している」と語る。さらに「織物をつくるための形であり、この建物に適した新たな仕事は限られるだろう。もともと機械にカネをかけても建物にはかけていないし、最新式の機械は冷暖房が必要だ」と続ける。

同社の場合は業種を転換せず、残した工場で織物カレンダーや桐生お召しを生産し、その現場を見せ、ショップで製品を売るという複合形態をとった。「先祖が大事にしてきたものであり、歴代皇族が見学したものを壊していいのかという思い。愛着心と安普請だという引け目と。残してよかったと思えたのは、平成元年のNHKによるライトアップです。ノコギリ屋根が闇の中に浮かび上がって、感動的だった」と振り返る。

ここで働く木村和子さん(51)は「半農半工、ノコギリ屋根に機音が原風景」と言い、正田婦美子さん(42)、半田朋子さん(30)は「空間の気持ちよさ」が大好きだ。「朝のやわらかい光、高い天井、すきま風が入り、夏場は土間に水打ちできる、やさしい空間。一日染め場にいても飽きない」と。

いまでは県内や埼玉、東京などの小学生が社会科見学でバスを連ねる。それでも経営は楽ではなく、本業で補填しているという。森島館長は「自助努力はもちろん、行政とのタイアップも必要な時期です」と指摘する。


八丁撚糸保存会がノコギリ屋根工場内で糸繰り機、管巻機、八丁撚糸機、ボビン揚げ機の復元に成功。地元小学生も見学に訪れた

昭和7年に建てられた大谷石のノコギリ屋根を買い取り、「小さな自動車博物館」としてオープンしたのは医師の前原勝良さんだ。クラシックカーのコレクションは手塩にかけて整備し、いまも現役で走り回ることのできる車ばかりだ。当初は保管のためのノコギリ屋根だったが、妻の瑠美子さんの絵画ギャラリーも併設して、毎週日曜日に公開している。

また、桐生八丁撚糸機保存会の活動も注目される。桐生お召しの製織に不可欠な、緯糸を強く撚るための八丁撚糸機を、ノコギリ屋根の空き工場を借りて復元した。使われなくなって20年30年経っていた機械の部品を交換し、つなぎ合わせて動かしたのは、70代80代の元職人たちである。自分たちの技術と経験知を伝え残したいという思いで再現されたかつての撚り屋を、地元の小学生が訪れ、生きた社会科学習に目を輝かせていた。

彫刻家の掛井五郎さんが使っていた当時の様子。「ここから世界に向かって仕事をしたい」と、創作意欲をみなぎらせていた

共同アトリエに

空を刻むシャープな形状、内部空間の複雑な線の交錯、高度で先鋭的なものづくりを世界に肩を並べて実践してきた先人の魂魄。ノコギリ屋根はそれ自体、かけがえのない作品といえるほどだが、そこに渦巻くエネルギーを創造の糧にする取り組みも目立つ。

彫刻家の掛井五郎さんが4年4カ月の間、アトリエとして旺盛な創作欲を開花させたノコギリ屋根がある。彫刻にとどまらず絵画、版画と、ここで生み出された作品は各地に旅立っていったが、滞在中はアプローチに作品を置いて自由に見られるようにし、彫刻たちのおしゃべりでにぎやかな場になっていた。現在は「オリジンスタジオ」として、空間デザイナー・ヤマザキミノリさんとその仲間たちや写真家の共同アトリエになっている。

とてもドラマティックな変貌を遂げたのが、「森芳工場」だ。東京芸術大学の学生や大学院生らが自主企画する現代美術展、その名も「桐生再演」は、1994年からほぼ毎年、桐生の街を舞台に夏から秋にかけて開催されてきた。美術館やギャラリーのホワイトキューブではなく、人々がふつうに暮らす街の一画に美術が入り込み、日常の風景を異化する試みの現場として、また10人前後が滞在制作するための宿泊場所として、ノコギリ屋根と隣接する母屋が提供されてきた。

作家集団によって再生工事中の森芳工場。壁も天井もていねいに手作業で解体され、骨組みだけになったところ。プーリーは象徴として残された

明治時代から機屋経営にとどまらず織物伝習所としての性格を有していた工場だけに、所有者の理解力は伝来のものなのだろう。しかし昭和初期建造のノコギリ屋根は廃業して30年以上たち、中央の梁が腐るなどして死に体を呈していた。そこで内部を封鎖して外観をすべて、壁だけでなく屋根も真っ黒に塗ったのが赤池孝彦さんだった。「桐生再演」の一環である。

巨大な作品として街なかに屹立した黒いノコギリ屋根は所有者の心を揺さぶり、解体の危機を自ら乗り越えたといえる。信頼を得た作家グループは新たに滞在型アトリエとして再生すべく設計プランを提示し、工事に入った。専門業者の手はもちろん入っているが、赤池さんら作家グループは美意識のみならず肉体労働も惜しまず、少しずつ内装や家具づくりも進めた。

3連のうち1連は床暖房を入れた居住棟とし、2連がアトリエ兼ギャラリースペース。老朽化したノコギリ屋根がボランティアによって再生された、先駆的な例となろう。お披露目展ではそのプロセスを見せたほか、芸大生らによる連続ワークショップを開催したり講演会場に提供するなど地域との交流をはかっている。6人がここで年越しして卒業制作の大作を仕上げたことも、東京近郊の学生・作家のアトリエ需要が高いことをうかがわせる。現在は会費制の運営委員会で方針を決めている。

「東七丁目工房」も共同アトリエとして10年。造形作家・金原寿浩さんが、たまたま目についたノコギリ屋根の所有者と意気投合、夫婦で埼玉から移住することになった。彼は山があり川が流れ、独特の景観や個性的な人の暮らす桐生のまちをも気に入っている。ノコギリ屋根は内部を区切って桐生在住の友人たちも使用、所有者自身が1区画で染色などを行っている。開設当初はアトリエ展として内部を公開したが、その後は個々の地道な制作の場となっており、知る人ぞ知る存在だ。

際立った活動を展開している「無鄰館」については、所有者である館長自身の記述が後の章にあるので、そちらに譲りたい。

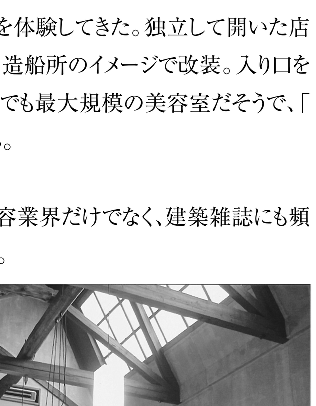
北窓からの光のうつろい美しいノコギリ屋根が、仮設劇場になった。安藤朋子さんの一人芝居「パラシュート・ウーマン」の1シーン

ギャラリー、劇場に

ノコギリ屋根と美術のかかわりは、1994年から、「桐生再演」の作家たちが市内のあちこちで繰り広げてきた。

森芳工場だけでなく、川内町の今源織物、東久方町の金子織物、本町一丁目の早佐織物、巴町の現アッシュなどである。インスタレーションゆえ通常1カ月ほどで展示公開は終了するが、作家が場や建物の特性を見据えたうえで、またはそこからのインスピレーションで作品を制作する方法だけに、作品のある時空が強烈な訴求力を持つ。非日常の小旅行のようでに興奮度も高い。

こうした試みによる発見も多く、「再演」には定宿ができた今後も街に出て、新しい場を開拓してほしい。


広い空間で、幅広い年齢層の客もスタッフも、のびのびとくつろげる。「ノコギリ屋根の美容室」を積極的にアピールするアッシュ

これも仮設であったが、本町二丁目の大谷石のノコギリ屋根工場が2003年秋、劇場となった。

内容とテーマが絹織物と労働に深く関係することから、役者や製作者側がノコギリ屋根での公演を熱望したものだ。幸い、織物会社の倉庫として使われていた街なかで交通の便もよいノコギリ屋根が、七五三の出荷期のみ、かなりのスペース空くことがわかり、舞台にすることが可能となった。

ここで深夜まで稽古を積んだ役者たちは、北窓からの光の変化の美しさに驚嘆し、積極的に照明効果に取り入れたほどである。作品の力で、やはり日常そのものが芸術に昇華する現場に立ち会うことができた。

美容室に

「ノコギリ屋根の美容室」を意識的に打ち出しているアッシュ代表の今泉裕之さん(37)は、「モチベーションを上げる、いい空間。業界イメージにもプラスになり、子どもから年配の人まで、いろいろな客層が入りやすい店になっている」と評価する。

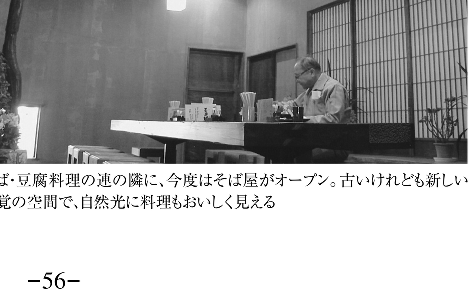
この大谷石のノコギリ屋根は、子どものころから知っていた。イギリスに留学して、外は古いまま、内部を最新の快適さに整えたギャラリーやショップのかっこよさを体験してきた。独立して開いた店が手狭になって、この建物を借りることになり、港町リバプールの造船所のイメージで改装。入り口を大きく開け、扉や窓枠は朱色に塗ってアクセントとした。北関東でも最大規模の美容室だそうで、「夏は涼しく快適ですが、冬は足元が寒いのが難」と微苦笑する。

「古い建物からは、ものを創造するためのインスピレーションを得ることができる。スタッフもどんどん育っています」。美容業界だけでなく、建築雑誌にも頻繁に取り上げられるため、遠方からの見学者も多いということだ。

飲食店に

ゆば・豆腐懐石の「若宮」は、さらに隣りの1連をそば屋に改装した。戦後の木造ノコギリ屋根のうちの2連が飲食店になったわけだが、「朽ちる寸前で、大幅に手を入れた。空いているノコギリ屋根は早く貸して、早く手を入れたほうがいい」と佐々木綾子社長は指摘する。

「自分が植えた木を孫が伐る」。営々たる梅田の林業家に生まれ、いまでも


ゆば・豆腐料理の連の隣に、今度はそば屋がオープン。古いけれども新しい感覚の空間で、自然光に料理もおいしく見える

チャンバラ映画が大好き。「室町か元禄の時代に戻りたいよ」と言い、自然と古いもの、人情をこよなく愛でる。懐石料理店は10年目、そば屋は昨年冬のオープンで、いずれもノコギリ屋根の傾斜面を生かしつつ、タイプの異なる和みの空間になった。

そば屋の天井には養蚕の籠を張り、中二階を設け、柿渋を塗った和紙の壁紙、テーブルは古民家の梁。欄間を縦につなげて間仕切りにし、照明も落ち葉かきの籠や豆腐の型箱を使うなど、随所におもしろい仕掛けが見られる。

「鉄骨、コンクリートの冷たい時代は終わった」と、改装インテリアすべてを手がけた岡村建一さん(64)が明言した。

「ノコギリ屋根には珍しく東に窓があるでしょう、朝日がパーッと差し込んで、それは気分いいよ」。食べ物は無添加、昔ながらの手作りがモットー、人間のいる場も同様だ。

高架下という立地が残念な公衆トイレ

ノコギリ屋根を擬態する交番

新たなノコギリ屋根

桐生を象徴する建造物はノコギリ屋根であるという認識が広まったためか、新築のさまざまな建物に応用されるようになった。

老人介護施設サンホープケアハウス、本町三丁目商店街のトポス、桐生ガス相生支店、それから公衆トイレまで。ノコギリ屋根の良さを意匠だけでなく、入居者、利用者の心理に及ぼす効用まで考慮しているものもある。残念ながら公衆トイレは鉄道高架下にあって、採光面では無意味だが、暗いイメージを払拭しようという狙いはわかる。ほかにも交番の外壁に三角のタイルを貼り付けたノコギリ屋根の擬態には、おかしみを感じた。

新旧のノコギリ屋根が並び立つところもあり、桐生の新たな景観となっている。

3.「所有者が果たしうる役割　所有者の想い」

私が所有する建物は、約70年前「飯塚機業の織物工場」として建てられたものです。「大谷石」造りの外壁は、西洋の古城を思わせる独特な雰囲気をかもしだしています。織物工場や養蚕関連工場として稼働した後、カーテンのショールームとして使われ、それを最後に、数年前から休眠状態となっていました。その後の使用方法に関し、公での管理・解体案を含めいろいろと検討されたと聞きます。この貴重な財産をなんとか残したいと考え、平成15年より使用させていただいています。

「現状」

外装は勿論、室内も出来るだけ前所有者が使われていた物を残し、建物の歴史を汚さないように心がけました。この70年の歴史に見合う使用方法として、日本のクラシックカーを集めた「小さな自動車博物館」として一般公開しています。50年前発売された「観音開きクラウン」を筆頭に、4代目までを含めて約10台展示しています。同時に油彩画を中心としたギャラリーも併設し、また講演会場とし市民講座等にも使用しています。

「保存に関して」

新しく所有者になる方は、建物自体の歴史を知っておくことが必要と考えます。それにより建物への愛情、活用方法も自ずから出てくるでしょう。私の場合も前所有者からこの立派な建物を造った経緯、創業者の人となりを拝聴しました。また家族の方々のお話からも、建物に対する深い愛情を感じ取る事が出来、永年保存して下さった方々への感謝の心を一層強くしました。倉庫で使う予定がクラシックカーとギャラリー構想に変わった大きな要因です。

使われなくなった建物の取り壊しが進んでいます。この貴重な産業遺産を残す方策を急がなければなりません。所有者のご意志が優先されるのは当然ですが、それと共に財政的バックアップが欠かせません。老巧化した建物を維持するには屋根や外壁の修理など、常に手入れが必要です。税の問題もあります。個人では支えきれないのが現状です。　市民をはじめ多くの方々に、産業遺産としての「ノコギリ屋根」の重要性、再使用への魅力を理解していただき、市民活動として維持・管理・再使用が出来るようになればと考え、使用方法の一例として微力ながら一般公開しています。

これからもお譲り下さった方々が寂しく思われないように、歴史ある建物を保存してゆきたいと考えています。

MAEHARA20th Gallery and Museum in Kiryu
館長　前原勝良

4.桐生から世界へ
——芸術・文化の創造の場としてのノコギリ屋根工場

——無鄰館　MURINKAN——

「無鄰館」は近代遺産と呼ばれる歴史的建造物群を現代社会の中で多角的に活用し術(まち)づくりのデザイン要素として、文化的生産性を上げている古くて新しい施設です。そのひとつは、歴史的織物工場(旧北川織物工場)と、ここに集うアーティストたちとが熱く融合して機能している創作工場であり、まさに、ザ・アーチスツファクトリー(芸術家集団工場)と言える部分です。「無鄰館」のノコギリ屋根の古い織物工場には「築造者の気魄(きはく)と歴史的エネルギー」が充満しています。このエネルギーとは、高度な工業生産技術力で織られた美しいデザイン紋様の布づくりに投入された先人の情熱と時間経歴の持つポテンシャルの高いエネルギーです。ここで活動するアーティストたちは歴史的建造物(近代化遺産)の持つ強烈なクリエイティブ・エネルギーを背景にしてそれぞれに創作活動を続けています。ここは今、全体にオーラが渦巻くアート&デザインの一拠点であり、反ブラックホール型のエネルギー発生源・震源地と言えます。湧き出るエネルギーの乗り移った作品群が次々と外へ飛び出していく不思議なアーチスツファクトリーです。併設の小ホールでは音楽や映画、文化教室、桐生笑学校が企画され、ギャラリーでは各作家の作品が展示されています。また、古いレンガに映されるハーブガーデンのカルチャー教室では香り、色、健康等をテーマとしたヒューマン・フィトテラピーの実践に取り組んでいます。

もう一方、純和風住宅、蔵、和風庭園、祠(ほこら)、上市場と呼ばれた買場通りの町家等の歴史的建造物の一部は日本の伝統芸術、芸能など日本文化を理解するための研修や国際交流の場として新たな活用がされています。かつて桐生は日本の近代化の国力を支えながら大きな繁栄を遂げた繊維の町でありました。本町一丁目、二丁目は桐生新町発祥の地として当時の産業遺産や文化遺産が点在し、江戸時代の地割りや路地も残り、その名残りを留めながら生活しているもっとも桐生らしい地域です。

本町二丁目には歴史的建造群の中でもとりわけ有名な「有鄰館」という古い商家を活用した市有のイベント施設が存在しています。本町一丁目の「無鄰館」は本町二丁目の「有鄰館」に敬意を表しつつ、相対するもの双方の求心力と相乗効果に引かれて自然発生的に名付けられました。宇宙にはプラスとマイナス、男と女、陰と陽、有と無などが在るごとく……。

「無鄰館」の建造物群は明治から昭和の初期に築造され、当時は超々上質な絹織物を生産し

世に提供しておりました。現在、「無鄰館」として再生(突然変異)したこの施設は単にイベント専用の施設ではなく総合的な工芸・技術による創作・革新(イノベーション)の一拠点となりました。桐生の伝統的個性である歴史遺産が知的産業に活用されて蘇るとともに天然に恵まれた美しい桐生市が環境に配慮した先進的なものづくりと情報のまちとして進化し、世界的アーティストや技術者、デザイナーたちの集積する「小さな世界都市」が形成され魅力ある地域生活圏が構築されていくことを願っています。

桐生全域がバウハウスとなり人材誘致を活発にし、古くから自由人が集まり活躍した桐生再創をすすめることは企業誘致を超えるものであると思います。スローではあるが力強い先進国の新しいヒトの生き方の手法のひとつとして未来に向けた地域発のルネッサンス波動となるよう希求しています。

同時に「無鄰館」は成熟した桐生が芸術文化の集積した都市型産業観光都市という一面からアーティストやデザイナーたちを核とした国際交流、国際親善のなかで異文化を理解し人類愛のもとに広く世界平和の実現に貢献することを目的に運営されています。

無鄰館館長　北川紘一郎